

北海道十勝地方の大樹町にある宇宙港「北海道スペースポート」(HOSPO)が存在感を増している。「アジアの宇宙産業の中核」を目指すHOSPOは、民間企業が利用可能な滑走路併設のロケット発射場としては国内唯一。打ち上げを検討する国内外の企業が相次ぎ、構想実現に向け、着実に歩みを進めている。

「アジアの中核」実現へ



大樹町にある「北海道スペースポート」(スペースコタン提供)

北海道の「宇宙港」存在感増す



新たな発射場「LC-1」の完成イメージ図。ロケットの組み立て棟や燃料供給設備などを備える。来年9月に整備を完了する予定(スペースコタン提供)

ロケット発射の適地として「大樹町は米ケネディ宇宙センターのあるケープカナベラルに匹敵する」と話し、期待するスペースコタンの小田切義憲社長(札幌市中央区)



▽台湾系企業打ち上げ 2019年、ベンチャー

企業のインターステラテクノロジズ(IST)が観測ロケット「MOMO」3号機の打ち上げを実施。単独の民間企業として国内で初めてロケットを宇宙空間に到達させ、注目が集まった。その打ち上げ場所として選ばれたのが大樹町だった。

大樹町に本社を置くISTは現在、民間の人工衛星を搭載した新型ロケット「ZERO」の打ち上げを予定。ロケットの組み立て棟や燃料供給設備を備えた新発射場がHOSPOに整

備される26年以降に実施する予定だ。

海外系企業の利用も始まっている。今年7月、台湾のロケット開発企業の日本文人が、国内初の海外資本によるロケット打ち上げを行った。現在、再使用型ロケットを開発する「将来宇宙輸送システム(東京)や米国のロケット開発企業「ファイアフライ・エアロスペース」も利用を検討する。

▽世界でも有数の適地 なぜここまで注目度が高まっているのか。HOSPOを運営する「スペースコタン」の小田切義憲社長は

国内外企業の利用検討相次ぐ